

「どんぐりの家」放課後利用の小中高生



大学生と一緒に、貼り絵制作に取り組む子ども

八学大生
考案

八戸市中心街で展示へ

八学大の事業は本年度、同学科の大木えりか講師のゼミに所属する3年生4人が、市の学生まちづくり助成金を受けて取り組んでいる。市内の福祉施設2カ所でも八幡馬などのオブジェを制作しており、学生がそれぞれの施設を訪れて活動を支援する。

発案者の佐々木綾奈さん(22)は、同市のマチニワで色とりどりのビニール傘が天井空間を彩るイベント「アンブレラスカイ」を見て、「ものづくりを通じて障害のある人が『上を向ける』イベントをやってみたい」と思ったという。

どんぐりの家では、三戸町周辺の小中高生約10人が9月から貼り絵制作に着手。絵本「11ぴきのねこころんこ」を参考に、縦1・7メートル、横2・7メートルの大作を作り上げた。

南部町立南部小5年の小田原陽向君(11)は「初めての貼り絵だったので難しかったけれど、いい出来栄えになった。目立つ所に飾ってほしいな」と笑顔を見せた。

展示は12月中旬に同市のマチニワと「はっち」で行い、その後も展示できる場所を探すという。佐々木さんは「活動を通じて人と会い、関係を構築する大切さを実感した。人のつながりが詰まった作品を見てもらえたら」と力を込めた。

11ぴきのねこ貼り絵に

三戸

三戸町で障害者就労支援に取り組む、NPO法人「どんぐりの家」(梅田悦子理事長)の放課後デイサービスで23日、利用者の児童生徒が貼り絵制作のワークショップに取り組んだ。八戸学院人間健康学科の学生が発案した、障害者の社会参画と地域活性化を進める事業の一環。完成した絵は来月、八戸市中心街で展示する予定で、子どもたちは「頑張って作った作品をたくさんの人に見てほしい」と話している。(上條哲洋)